

#### 4. コロナ禍を活かした危機管理

コロナ禍の影響下ではおそらく多くの人が後知恵バイアスに悩み、困惑し、言い出しなくなっているような気がします。つまり、結果は予測が可能だった、当然〇〇すべきだったというようなことではないかと思います。後手の対応だったとか、危機管理がなっていないとか多くの意見を聞きました。いままでに無いような経験の中で、何を学んだのか、活かせることは何か、複合被害を防ぐ、後手の怖さと先手の読み、修正のプロセスと勇気、情報の正確な理解と判断、情報の玉石混交、自分だけは大丈夫か、危機管理とは、自己管理とは何か、など自問自答することが多くなったような気がします。今回のコロナ禍は、自然災害と大きく異なることもありますが、対応という面ではさまざまなことを学んだような気もしています。

人間が誕生して以来さまざまな環境の変化があったと思われませんが、その変化に何とかついてきたというか対応してきたと思います。おそらく自然現象も疫学的な都合の悪いことを多々経験してきて、そのたびにそれなりに対応できてきたように思います。しかし、その環境が急に変化すると一時的には不適合が起きてある程度の犠牲も払うことになります。そして、それが大きいほど、あるいはその速度が速いほど、不適合の幅も大きくなるのは当然です。先史人類は農耕へと定住するまでは、比較的良好な健康状態だったような気がします。それが大きく暮らし方を変えたことで、変化への対応に苦慮することになったのではないかと、その状況は現在でも続いているような気がしています。そして、悪いことに人類は自らの健康や病気となる要因に対して改変する能力を獲得したことで、新たな課題が発現するという繰り返しになっていて、今回のコロナ禍もその延長にあるのかもしれませんが。この辺のプロセスは、自然災害に対する人間の対応も類似しているように感じ、それは希望と苦痛の生き方であるともいえるのかもしれませんが。コロナ禍では、変異株という、いわば進化した病原体がみつっていますが、まさに人々の行動が選択圧になっているように思われますが、自然災害における被害も類似しているような作用の結果ではないかと感じています。

暮らし方を含む環境の変化はそれまでの環境への適応が、逆に変化した環境への不適合を示すことになるのかもしれませんが、適応に完全なものはないというのが真実なのかもしれません。狩猟や採取がうまく行き過ぎると生態系のバランスが崩れるし、牧畜が拡大することで逆に草地が荒廃したりすることがあります。実は自然災害でも類似しているとはいえ、課題の解決策は見出せないのですが、このへんは共生の仕方ということになるのかもしれませんが。